



## 子どもの生きがい



浜田駒子

### 生きがいとは

一般に生きていくはりあいを“生きがい”という。私は、もう一步つっこんで、目的があつてそれを遂行していく喜びも生きがいと解釈したい。

前者は、単に生きていくはりあいであるから、物でも生きがいであり、子どもが生きがいとか、テレビを見ることが生きがいとかいえる。

後者は、まず自分があって、意志によつて目的をきめ、それに向かつての行動を意味する。

### 子どもに生きがいがあるか

子どもの生活を見ていると、遊びが生きがいといえよう。目を輝かせて、外へとんで出ていく姿を見ると、「生きているなあ」と感じる。これは前者にあたる。

そして、どの子にも共通かと、いうとそうでもなくて、私たちの三人の子どものうち、一番下の子ども、次男が、最もそれを感じさせる。

長男は学齢前、大せいの子どもといつしょに、ガキ大将の下で一兵卒として遊ぶということを、経験したことがないようだ。次男は、幼稚園だからと小学生の野球に入れてもらえない、涙を流しながら、たま拾いをさせてもらつたり、（実際は遠くの方にいて、誰かがホームランを打つと夢中でとんでいて拾い、たまひろいに手渡すのであるから、たま拾いのたま拾いである）ある時は、小学生、幼稚園と一列にならばされ、家々のまわり二周のマラソンをさせられる。ガキ大将氏の大好きなジシャクが人数分ならべられて、一等は大きなもの、二等はボウジシャク、三等は小さいのを二つ、などときめかれている。

結局は年の順になるのだけれども、小さいのを一つもらって大喜びしている。

このように、子どもの生きがいは、『生きている』ということだ

こと、実在的な価値をみとめることが生きがいということだ  
と思う。

子ども自身はそれに気づいていない。

おとなが感じるよう、「きょう一日しあわせであった」と  
か、死ぬときに

「私はこういう生き方をしてきた。自分は満足である」

といったように、子ども自身感じてはいない。

次に、さきに述べた後者の場合—目的があつてそれを遂行  
していく喜びーの生きがいは、子どもの場合あるだろうか。

これもはつきりいつて、ない。

しかしその芽はあると思う。その芽をつみとつてしまわな  
いように親は気をつけなければならないと思う。

幼児の場合、環境によって態度がやしなわれる。  
人間が生きていくにはいろいろな価値をみとめて生きていく。  
く。価値に向かう姿勢によって態度がきまる。その態度によ  
つて生きがいがきまつてくる。

だいぶややこしくなってきたので、私の子どもの場合をの  
べて具体例とする。

天文学者になりたい

## 一、その芽

次男は、非常に自由である。

長男は、私の『物の考え方』から離れての自由はなかつた  
と後悔する。いつしょに物を見、驚きだけを伝えればよかつ  
たのに、そして、それから長男の言葉を待つてやればよかつ  
たのに、私にその余裕がなかつたと思う。

長男の考えことは、手にとるようわかる。感動も予測  
できる。

次男のそれは全くわからない。

夏の夜、毎晩星を見た。北極星、北斗七星、その他少々の  
星座しか私は知らないのだが、長男が本を見ながら説明す  
る。長男が星座を発見し、皆に方向を教える。

次男は長男の指さす方を見るが、あまり関心はなく、夜、  
外へ出るという方が嬉しいらしかった。

幼稚園年長組の秋、先生と子どもたちの話の中に星が登場  
した。星座に名前がついていることも知って、それにまつわ  
るお話をきいた。

誰かの家は四階で、その屋上にやって来ると、一人がいい  
出すと、こわい、こわいと全員、叫んだ。怪獣と星とを結び  
つけて考えはじめ、空想は際限なかつた。

次男は、星ってふしげだなあーと思つたらしい。おもしろ  
いなあーとも思つたらしい。家に帰つて学習百科の天文を見

ていた。読んでもらいたくなると、誰かれどなく「ここ」読んで、「ここ」読んで」という。

父が、わかりやすく説明してやると、まゆの間にたてじわをよせて真剣にきいている。星の話を次男にしているつもりでも、光年の話になると、どうしても父と長男のS.F.の話になり、「光の方向に向かっていくと年をとらない」などという話になってしまっても、物もいわずに聞きいっている。

## 二、環境

父が、今、一つの研究にとりくんでいる。父がどんなことをしているか、また、物事は順序だててちみつにしていかないと、單なる思いつきで生きていってはいけないと、父の研究の資料を持って帰つて子どもたちに見せる。それはぼう大きな数字のら列で、子どもに理解できるものではないが、見ておくだけは見せておきたいという父の心である。

また、父の研究に対する情熱は大したもので、日常の会話にも時々話ができる。次男が

「おとうさんの話には、必ず概念っていうのがでてくるけど概念ってナーニ」と聞くくらい、非常に楽ししそうに研究の話をするのである。

日曜ごとに、父の研究グループが来る。月一回は母の研究グループが来る。けつこう楽しそうに、ワイワイ、ガヤガ

ヤと話をしている。いつしょに食事もする。ハイキングに行く時もある。

何かをつきつめて調査し、考えていくことは楽しいことだと思つているらしい。

## 三、次男の現在の考え方

母「おおきくなつたら何になるの？」

「天文学者！」

母「へエー。はかせになるの？」

「ちがうよ。大はかせ！」

「ぼくどうだいへいってね」

母「東大？」

「海のところに立つている燈台だよ。舟で行くんだ。そしてね、一年間研究して、一年たつたら舟をこいで家に持つて帰つて、おとうさんに見せるの」

「燈台で研究してから、そのつぎ、アメリカに行くんだ。アメリカの星と、日本の星と違うかどうか調べるんだよ。そこで、研究したのをおとうさんに送るときにアメリカの切手をはるの。

そうすればおにいちやんにアメリカの切手をあげられる

## 四、親の態度

もん

こう次男がいっても、全生活の中のわずかな部分である。

こうした考えがあるからといって、そのまま天文学者にすべく、望遠鏡を貰い与えて、毎日観測を強要することはしない。かえつてすることによって芽はしぶんでしまうからである。

その子どもが、異常なほど星にうちこんでいたとしても、私どもはやはり、他の事象に眼を向けさせるよう刺激を与えていくと思う。

何ごとも、物ごとに向かうとき、集中性と、自律性、持続性が必要になってくる。これは、小さい時からのしつけに関係しているもので「大きくなりました。これをなしとげさせよう親が努力します」というやり方ではいけないのである。自らの力で物ごとに当たつていけるよう、それまでに見ておかなければならない。

次男がはたして天文学者になるかどうかはわからないが、その芽をつまないよう努力しながら、自らそれを感覚からとらえていったことに、楽しさと頼もしさを覚えるのである。

もし子どもが、遊びの中から、生活の中から、将来につながる生きがいをもたなかつたら、親は意図的に与える

ことも可能と思う。円満な人格に育つように環境をととのえながら、刺激を与えてみる。それに興味が一致すればそれよし、一致しない場合は、自らの欲求の出るまで待てばよい。

### 結論

#### 一口について

「子どもが一人前になつて社会に出て行くときに、生きがいがもてるような人間になるよう、環境をととのえておくのが親の役目」といえる。

それには、さきにのべたように、集中性、自律性、持続性をもたせるよう毎日の生活のしつけを考えることだと思う。そのしつけは、親の人生觀に根ざしているもので、あつちの本に書いてあつたから、こっちの新聞に書いてあつたことがステキだからと、その時々の気分や、流行にどらわれずにいきたいものである。

さらに、両親の人生觀は、そのまま家庭生活に現われているものだから、子の生きがいは、目的は違つても、その態度は親のそれと一致しているのであろうと考える。